

福祉実践のあり方についての研究

—— 獲得目標と福祉実践の関わりをめぐって ——

子ども学科 佐野英司

はじめに

社会保障、社会福祉予算の削減が続く中で、生きていくことに困難性を実感する住民が激増している。「生存権」をうたった戦後日本の社会保障・社会福祉制度は1970年代初頭の第1次オイルショックを契機に「福祉見直し」、「福祉切捨て」、「日本型福祉社会論」へと歩を進め、1990年代からの新自由主義論に基づく「社会福祉基礎構造改革」は社会保障・社会福祉の公的責任の放棄と「新しい社会連帯論」の強調、さらには社会福祉を市場経済下での売買の対象へとその性格を変えさせてきた。それは保育においても、高齢者福祉においても、さらには障がい者福祉や公的扶助においても同様である。そうした国の社会保障・社会福祉制度・施策に対し、どのようなスタンスをとるかが、私たち社会福祉研究・教育に携わるものにとって問われていることは言うまでもない。

こうした国の制度・施策の中で住民の生存権を必死で守ろうとするいくつかの取り組みは、その地域に住むもののみならず、現状を憂う全国民の注視的でもあった。

本研究は、全国的にみるならば、たとえ小さな実践ではあっても、住民を主体に住民の生存権を守ることに努力し、たとえ社会福祉の充実・拡大を好まない策謀があったとしてもそれと闘いながら、住民こそ主人公の福祉のまちづくりを追求展望する実践手法の理論化をめざすものである。具体的な研究事例として長野県下伊那郡にある泰阜村と秋田県鷹巣町（現・北秋田市）を取り上げた。両地域は在宅福祉の最先進地として全国的に知られるところとなっていた。しかし、その生成過程は大きな違いを持っている。その生成過程から手法等を分析しながら普遍化していく道を模索して

いくことは重要である。

1. 泰阜村と鷹巣町の福祉とは

長野県下伊那郡泰阜村は飯田市に隣接した人口2000名の小さな村、林野率87%という平坦地がほとんどないこの村は村民の食料を賄いきれず第2次世界大戦末期に1200名もの村民を満蒙開拓団として送り出し、632名もの犠牲者と多くの残留孤児を生み出した悲しい歴史を背負っている。そうした経験が影響したか、村は村民の死を村で看取するという政策を展開し、徹底した在宅福祉を進めている。介護保険下においても1割の利用料自己負担のうち、その6割を村が負担するばかりか利用限度額を超えた全額を村が上乗せ負担している。したがって村民負担はどのような要介護度であっても15000円程度に収まっている。村民の村に対する信頼は熱い。

一方、秋田県鷹巣町の福祉は1991年の岩川町政の誕生に始まる。しかし、単に福祉に重点を置いた町長の誕生が“鷹巣の福祉”を形づくったということではない。むしろ、“鷹巣モデル”として全国に名を馳せたのは翌1992年6月に発足をみた10にも及ぶワーキンググループが推進する住民参加の福祉であったといえる。もっとも人気があったのは高齢者福祉についてのワーキンググループで、富山県の全室個室の老人保健施設「ケアポート庄川」を参考にしながら「高齢者総合施設ケアポートたかのす計画」をつくりあげ、行政に働きかけたのであった。前年に誕生した岩川町政は、「町政の主人公は町民」「町民の声に耳を傾ける」と公約していたのが町民を励ました結果であったといえる。しかし、肝心の町議会は、そうした住民の声をことごとく退けた。ワーキンググ

グループに集まった町民は最高時 200 名を超え、福祉や教育をはじめ 20 を超えるグループができ、町政に町民の声として届けられていった。町民は町民の声に耳を傾ける町議会構成を求め 96 年 6 月になってケアポート計画をもとにした「ケアタウンたかのす」がようやく町議会で議決され、実現することに漕ぎ着けた。そして「80 床全室個室の老健施設」や 24 時間ホームヘルプの施策、「高齢者安心条例」の制定等、全国から年間に 30 00 人もの視察者がやってくる「鷹巣モデル」が出来上がった。

2. 泰阜村福祉の将来への懸念と「鷹巣モデル」の挫折

“村民の死は村で看取る”という泰阜村の在宅福祉は特筆ものである。“公共事業よりも福祉を！”と表現される泰阜村の行政姿勢は大きな反響を巻き起こした。しかし、林業と在宅福祉事業以外に大きな事業を持たない村から若者は仕事を求め都市部に移住していき、村の高齢化率は 30% を大きく超えた。老親の介護は村がみてくれるという安心感は結果として親と子の離反を促したともいえる。在宅福祉の充実とは、子に代って老親の介護を村がみるということなのか。在宅福祉は親と子や家族機能を補い豊かにするものであることが求められるのではないだろうか。泰阜村で家族関係の充実を支える在宅福祉とはなんだろうか。

本研究はその期待を鷹巣のワーキンググループにかけた。しかし、“鷹巣モデル”は 2003 年の町長選挙でもろくも崩れた。実際には秋田県有数の財政状況健全な鷹巣町であったにもかかわらず「福祉偏重で財政危機」「町の規模に比して福祉に偏り過ぎ」といったいわゆる「身の丈け福祉論」という誇張されたデマ宣伝の前に屈し、岩川町政から岸部町政へと転じていった。岸部町政は「ケアタウンたかのす」への補助金の大幅カット、介護保険の利用限度額を超えた上乘せ分への町負担のカット、「高齢者安心条例」の廃止、認知症グループホームや 24 時間ホームヘルプの廃止など

「鷹巣モデル」といわれ、全国の注目の的であった“鷹巣モデル”は一旦はほぼ姿を消した。そうになって町民ははじめて気がついた。

3. ワーキンググループによる“鷹巣福祉モデル”再生への道

本研究は、「誰もが住み慣れた地域で住み続けることを可能とする“住民主体の福祉のまちづくり”」という地域福祉の実践追求課題に真正面から挑もうとしたものであった。それを福祉の先進地である泰阜村、鷹巣町という 2 つのモデルを前にし、ただ単に、それらの地域における福祉水準を評価するにとどめず、その実践づくり過程を住民の参加と主体形成を同時的に追求しながら実現していくことをねらった。

泰阜村の実践は村行政主導であり、住民はあくまでも客体であった。それを住民の参加を促し、住民と村の共同事業による福祉にするためには鷹巣のワーキンググループ実践から学ぶことが不可欠と考えた。その可能性に対する取り組みは泰阜村住民の村行政に対する評価とニーズ調査が出発点と考えた。

鷹巣町は、2005 年 3 月、合川町、森吉町、阿仁町とともに合併し、北秋田市という人口 4 万の市となった。北秋田市の半分の約 2 万は旧鷹巣町である。住民参加のワーキンググループを単に旧鷹巣町だけでなく、北秋田市全域に広げ、さらに住民各層のニーズをもとに再編・再組織していくことが必要であり、本研究で現地においてその実践を手がけて展望を見いだすことを今年度の研究課題とした。

しかし、地縁血縁関係や個人の利害や思惑を巧みに利用した分断攻撃もあって既存のワーキンググループをもとにした地域再生をという段階以前の状況であることを認識せざるを得なかった。しかし、“鷹巣福祉モデル”を再生させたいという地元住民の確かな願いが存在していることも同時に確認した。

4. “鷹巣福祉モデル” 再生への取り組みの展望

筆者は、2007年12月8日（土）と2008年2月26日（火）の2回、町民250名を集めた「鷹巣福祉モデル再生のための学習会」に3名の研究者とともに臨んだ。「鷹巣福祉モデル」の再生が北秋田はもとより我が国の住民主体の福祉のまちづくりに欠くことができないものであることを訴えた。それは地元紙にも取り上げられた。

そして「北秋田市・鷹巣福祉のまちづくり支援

全国連絡会」（代表・同志社大学名誉教授・井岡勉氏）を呼びかけ人の1人としてこのたび結成し、また2008年8月16日（土）には「北秋田・鷹巣福祉のまちづくり研究全国交流集会」を200名規模で現地で開催する予定である。

本研究は、まさにようやく出発点に立った段階といえる。本研究はその小さな火種となったといえる。

介護福祉実践における「ホスピタリティ」の応用の可能性

田口 潤・関谷栄子・土川洋子・鷹野直子

1. はじめに

「ホスピタリティ」とは、「おもてなしのこころ」といわれるように、対象となる人に対する受容・尊敬の気持ち、相手の福祉の向上を求める気持ちなどの総称と考えられている。従来では、ホテルなどの接客業において、このような精神が重要であることが強調されてきた。また、近年では、病院などにおいても、このような精神が重要であるとの認識が示されている。

一方、福祉の分野でも、インフォームド・コンセントの重要性、権利擁護、自立支援などが強調され、利用者を受容し、尊重する精神が重要であるとされてきた。これに加えて、前述したホスピタリティの精神は、これからの介護分野においても重要な概念であり、これらの概念を介護福祉分野にどのように導入するかについて研究することは、重要なテーマであると考えられる。

介護保険導入以降、介護支援認定を受けた人が保険給付として受けるサービスを介護サービスと呼んでいる。介護分野で行われるサービスと一般的に使用しているサービスと異なる点がある。このことを踏まえ、福祉分野で「ホスピタリティ」について、介護福祉実践の中で応用できるのか検

討していくことは意義のあることである。

2. 研究の目的

本研究では、介護福祉実践のなかで「ホスピタリティ」が応用できるか、文献より検討することを目的とした。

3. ホスピタリティとは何か

1) ホスピタリティの定義

林田 [1] は、「心のこもったおもてなし」と定義している。また、鎌田 [2] は、「人を大切にする心」と定義づけている。さらに、服部は、狭義には、「主人と客人が同一の立場に立ってお互いに遇すること」[3]と定義している。広義では「人類が生命の尊厳を前提とした創造的進化を遂げるための、ここの共同体もしくは国家の枠を超えた広い社会における、多元的最適共創関係を形成させる相互容認、相互理解、相互確立、相互信頼、相互扶助、相互依存、相互創造、相互発展の8つの相互性の原理を基盤とした基本的社会倫理」[3]と定義している（図1参照）。どの定義においても、心をこめて接するということが共通している。